

6月の天候の特徴

1 6月の気象

(1) 6月の気象の特徴

6月といえばやはり「梅雨」に代表されます。梅雨は、日本、韓国、中国など東アジアにみられる現象で、日本では昔から「五月雨（さみだれ）」とか「つゆ」とか呼ばれ、「秋雨」または「秋りん」と並んだ長雨の季節現象です。梅雨の語源としては、この時期は梅の実が熟す頃であることからという説や、この時期は湿度が高く黴（かび）が生えやすいことから「黴雨（ばいう）」と呼ばれ、これが同じ音の「梅雨」に転じたという説などがあります。梅雨は、春から夏へと季節が移り変わる期間に北海道地方を除く（蝦夷梅雨と呼ばれる現象もあるが）日本の各地域で起こり、雨や曇りの日が多く現れます。この季節は、日本の南海上から高温多湿な太平洋高気圧が強まってきます。その際、沖縄や西日本では大陸の乾いた気団との間に、東日本や東北では冷涼湿潤なオホーツク海高気圧との間に梅雨前線が形成され日本付近で停滞します。梅雨前線の活動が活発化すると大雨が降りやすくなります。特に、非常に暖かく湿った空気が、停滞している梅雨前線に連続して流れ込むと、比較的狭い範囲で強い雨が長時間連続して降り続く集中豪雨が発生し、災害をもたらすことがあります。前線が長く停滞すると低温や日照不足で農作物に被害が発生することがあり、梅雨前線の活動が弱い年には空梅雨となり、盛夏期にかけて水不足が起こります。また、梅雨は年によって期間の長短があります。

四国地方の梅雨入りは、平年が6月4日ごろ、昨年は5月28日ごろでした。

(2) 愛媛県における6月の気象災害

右表は、気象庁の統計による昭和20（1945）年～平成20（2008）年の愛媛県内で発生した原因別災害回数表です。一番多い災害は、大雨・強雨、次いで濃霧となっていますが、そのほかにも、強風、少雨・乾燥、ひょうなどの災害が発生しています。

・大雨による被害

・平成13（2001）年6月19日、日本海に停滞していた梅雨前線がゆっくり南下し、20日09時には西日本の南岸に停滞しました。（右図参照）松山市では19日夕方から雨が強まり、20日午前3時までの6時間に178mm、19日と20日の2日間の雨量は6月の平年の雨量（240.5mm）を上回る263mmという記録的な大雨となりました。

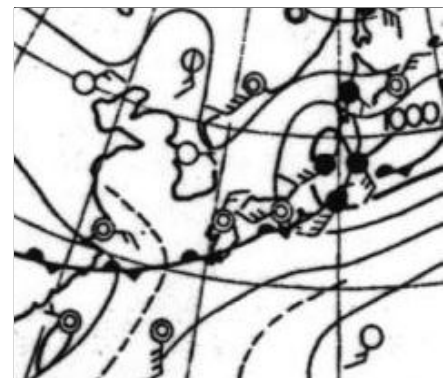
この大雨による被害は松山市を中心に、松山市高野町で発生した土石流により住宅が半壊して1名が死亡、6名が負傷しました。また、浸水家屋（床上、床下）346棟、道路損壊21カ所、土砂崩れ34カ所など被害が発生し、農業被害は10ha 291カ所、11億5千万円、林業被害は50カ所、10億6千万円にものぼりました。（愛媛県災害対策本部調べ）

愛媛県内における6月の原因別災害回数表

（統計期間：1945～2008年）

| 原因 | 回数 |
|-------|----|
| 大雨・強雨 | 37 |
| 霧 | 23 |
| 強風 | 4 |
| 少雨・乾燥 | 3 |
| 赤潮 | 2 |
| ひょう | 1 |
| 長雨 | 1 |
| 雷 | 1 |
| 合計 | 72 |

注：大雨と濃霧が共存の場合大雨でカウント



地上天気図 2001年6月20日09時

2 気象用語の解説 = 「土砂災害警戒情報」

平成19年6月1日から、愛媛県と松山地方気象台は共同して、「土砂災害警戒情報」の発表を開始しました。土砂災害警戒情報は、大雨警報が発表されている状況下で、大雨により土砂災害の危険度がより高まったときに市町名を特定して発表する情報で、市町の長に避難勧告等を適時適切に判断していただくために、また、地域住民の皆さまの自主避難の判断等に利用して頂くために発表するものです。

7 将来の降水量予測の詳細について

前回は日本付近の気温の変化の予測について紹介しました。今回は降水量の変化予測についてお話しします。今回も前回と同じく「気候変動に関する政府間パネル (IPCC)」の温室効果ガス排出シナリオのA2 シナリオ (経済重視で地域志向が強まるとの仮定) に基づいた日本付近の予測結果を紹介します。

1. 日本全体の降水量変化予測

- ・降水量の年平均は、ほとんどの地域では増加する。特に西日本での増加が大きく、多いところで20%程度の増加が見込まれる。7月の降水量が北日本や九州の一部を除き、広範囲で増加する。
- ・降水量の標準偏差は、東日本以西では概ね増加が予測されている。
- ・降水強度は、年平均ではほとんどの地域で増加する。
- ・最大日降水量は、年間では変化が小さいが若干の増加傾向がある。7月の無降水日数は、西日本で減少し、特に日本海側で顕著である。(図2)
- ・年間の降水量の階級別日数では、日降水量100 mm以上の日数はほとんどの地域で増加が予測されている。多いところで3日程度の増加となっている。

2. 四国を含む西日本の太平洋側の降水量変化予測

- ・月降水量は、11~4月は減少、6~10月に増加が予測される。最大のピークは8月である。
- ・無降水日数は、11~5月に増加、7~8月に大きく減少が予測され、8月の無降水日数は3日程度の減少となっており、梅雨明けの遅れ、もしくは盛夏期における降水日数の増加が推測される。
- ・降水強度は、11~2月はおおむね減少が予測される。6~7、9~10月は降水強度の増加が予測される。特に7月は降水日数の増加だけではなく、平均的な一雨あたりの降水量も増加することが示唆される。
- ・降水量標準偏差は2月に減少、6月に増加の傾向がある。

以上から、四国では梅雨が長くなるような天候が考えられます。また6月の標準偏差が大きくなっていることから梅雨前半の降水量は年によるばらつきが大きくなることが予想されます。水管理や防災への取り組みがますます必要となりそうです。

次回は気象庁が実施している二酸化炭素の測定について紹介する予定です。

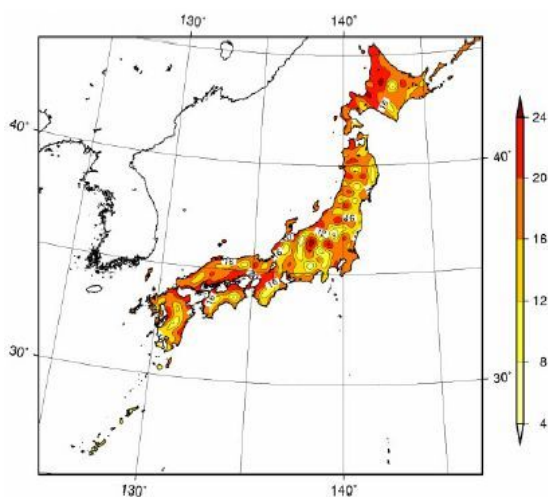


図1 歴史の実験による7月の無降水日数(日)
(1981~2000年平均値)

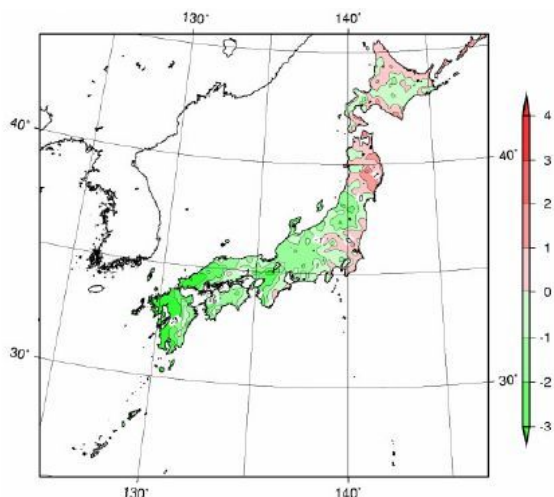


図2 A2シナリオに伴う7月の無降水日数変化量(日)
(2081~2100年平均値) - (1981~2000年平均値)